

「くろぼく強力」商品化の経緯について

2016年4月、私どもの酒米生産者の一人、杉山信一郎さんからある相談を受けました。平成26年産の強力米作付けにあたり、これまで使用していた圃場の一部を休める必要が出てきたため、その転用先に2反ほどの黒ボク土の圃場になることを了承してほしいという申し出でした。

黒ボク土とは火山灰が積もって出来た火山灰土で、黒くてボコボコした様相からその語源が来ているといわれます。腐植に富み、一見作物の栽培に適しているように見えますが、火山灰に含まれる活性アルミニウムがリン酸と結合し、腐植を容易に分解できない状態となっていることで、作物がリン酸欠乏を起こして育たちにくいとされる土壤です。

その知識を知っている者として少なからず戸惑いはあったのですが、2反程度の僅かな面積ということもあって申し出を承諾いたしました。

平成26年の初夏、定期視察で訪れた杉山米の圃場で意外な光景を見ることとなりました。もともと杉山さんの圃場のベースは砂壤土ですが、砂壤土の稲と黒ボク土の稲を見比べると、明らかに黒ボク土の稲姿に勢いが見てとれるのです。これには杉山さんも私も首をかしげるしかありませんでした。これまでの常識とは違う現象が起きている。偶然なのか必然なのか……。

田んぼの畦に座り、喧々諤々意見を交わす中で行きついた仮説。そもそも強力が発生した鳥取県中山村（現大山町）の田んぼは、伯耆大山が噴火した時に堆積した黒ボク土であり、ひょっとして強力は黒ボク土を好むのではないか。もしそうならば、これまで信じてきた稲作りを改めなければならない、少し検証してみよう。という方向になったのです。

そんなことから翌年（27年産）より強力黒ボク土壌での耕作面積を広げ、経過観察をすることになりました。また検証の精度を上げるためには複数年の作付けで観察する必要があります。同じように28年産でもそれを行うこととなりました。

この「くろぼく強力」なる純米酒は、上記の経緯によって試験作付けされた強力米で仕込まれた稲作研究も兼ねた試験醸造品ですが、酒の味わいの中に土質の特徴が現れるようあえて低精米とし、酵母も弊社で一番多く使用している協会7号を選びました。造り自体特別なことをやるのではなく、他の強力米で製造したものと比較しやすいよう普通速醸といたしました。

この商品は、私どもと杉山さんの共同研究がベースになっているもので、27BY酒として新しい工夫が盛り込まれている新商品ではありません。それをご承知いただいた上で貴店の商材としてお取り扱いいただければ幸いです。

尚、28BYにおきましては「くろぼく雄町」の製造も行っております。
あまり知られていませんが、雄町の発祥の地も鳥取県の伯耆大山の麓といわれています。
岡山県の農家の一人が伯耆大山参拝の帰りの道中、珍しい穂を見つけて持ち帰ったのが現在の雄町（当時は二本草と呼ばれた）の原種にあたります。

米の品種において、原種として線状心白を持つ米は世界でも 2 品種しかありません（山田錦も線状心白を持つが交配品種）。その 2 種とも伯耆大山の麓で生まれているのは偶然とは考えにくく、何かの作用が働いていると考えた方が自然ではないかとずっと考えておりました。

雄町が発生した田んぼも大山黒ボクであることから、そこに何かのヒントがあるのかもしれない。そんな好奇心から「くろぼくシリーズ」への展開に向かっているところです。

（ 山根酒造場 蔵元 山根正紀 ）